

《山下淳志郎教授の定年退職を記念して》



1967年11月、明星大学大学祭弁論大会にて

山下淳志郎さんの宿題

堤 史 朗

山下淳志郎さん（——こうした文章を綴る場合、日本社会の常識的用例に従えば「先生」と敬称すべきであろうが、淳志郎さんの人生観に照らした呼称は「さん」がいちばん適うものであろう。——）について語ろうとする時、私には忘れることの出来ないひとつの論稿がある。その論稿により、私は淳志郎さんの反省的に人生を生きる誠実な人柄に触れ、同時に学者としての厳しい在り方を知らしめられたのである。

その論稿とは、Henri Lefebvre : *Sociologie de Marx*. 1968年、の邦訳『マルクスの社会学』

（せりか書房、1970年）の「訳者あとがき」である。

これは通り一遍の「訳者あとがき」などでは決してない。「学問としての哲学」を専攻していた学者淳志郎さんが、日本社会の現実のなかで「自分自身」をどのように生き、そしていま現在をどのように生きるかの逡巡する様相が直截に語られ、ひとりの社会的人間として常に襟を正そうとする淳志郎さんの姿勢が看取されるものである。

1970年の時点から、45年以降の「自分自身」

に遡及的反省を加えて淳志郎さんは、「人間が人間としてあることこそ人間にとって真理であり、この真理が歴史を通して如何に歪められてきたか、人間から人間としてあることが如何に奪われてきたか、それゆえ人間が、この自己の人間であることを奪われている状況から、再び人間としてあることを取り戻すため、健全な人間的社会の確立を求め、考え、行動していた単純素朴な「自分自身」の陥穽を素直に見つめ、そしてそれへの自覚化を促してくれたH. ルフェーヴルの整然として説得力のある論理に学んだことを次のように述べている。

『『民主主義』を無条件に信じ込んでいた私に、その夢を破らしてくれたのも彼である。倫理、道德についても、そのかたくなな絶対観を納得的に破らしてくれたのも彼である。人間を、社会を、とにかく人間に関する一切のものをみ、考え、それに対するときは、常に歴史的弁証法的な把握を必要とすることを、納得のゆくように気づかせてくれたのも彼である」と。

この反省的記述は、学問上、研究上のこととしてだけでなく、日常生活での具体的な社会関係上にも淳志郎さんが終始一貫させた人間的姿勢として解するのは私ひとりの穿った解し方だろうか。

「ヘーゲルに於ける精神、時間、歴史」(『酪農学園大学紀要』第2号、1965年、所収)において、「実践的な歴史に於ける主体性こそ」を論稿の契機とした淳志郎さんの姿勢は、論稿「日本社会思想の存否——日本社会において社会思想の形成はありうるか——」で、日本における社会思想の不存在を指摘しつつも、日本社

会の市民一人ひとりが市民自身の自らによる社会の意識化、社会像形成の必要性を求め、社会思想を「市民自身が自ら形成主体として形成する社会についての像・イデー、即ち市民自体の市民自身による社会についての思想」(『明星大学社会学研究紀要』第16号、1996年、所収)との定義付けまで変わることない終始一貫した姿勢なのである。

このような淳志郎さんの学問上、研究上における反省的省察が、ひとりの社会的人間として人生的省察にも終始一貫していたからこそ、30年有余の大学生活において、学問的、思想的差異を超えた多くの人びとからその知的誠実さは信頼を獲ち得、特に明星大学の民主化運動は淳志郎さんがその精神的支柱で在りえたからこそその端緒をつかむ事が出来たのである。淳志郎さんの願いからすれば、現状には今なお不満が残るであろう。でも、その残された課題は次の世代に委ねられるものであるだろう。

われわれの願いは、学究者淳志郎さんが宿題としてきた「内実豊かな生きた現実的全体的人間およびその社会」に関する理論的体系化を完遂するための時間的余裕を十分確保してほしいという一点に尽きるのである。

山下淳志郎さん、長い間ご苦労さまでした。そして色々な面での助言、教示に対して本当にありがとうございましたと最後にお礼を言わせてください。

(つつみ しろ、本学科教授)

山下淳志郎教授略年譜

- 1928（昭和3）年1月3日 奈良県生れ
- 1945（昭和20）年3月 北海道廳立岩見沢中学校卒業
- 1945（昭和20）年4月 北海道帝国大学農林専門部農学科入学
- 1947（昭和22）年3月 同上 中退
- 1947（昭和22）年4月 北海道大学予科（文類）入学
- 1950（昭和25）年3月 同上 卒業
- 1950（昭和25）年4月 北海道大学文学部哲学科（旧制）入学
- 1953（昭和28）年3月 同上 卒業
- 1953（昭和28）年4月 北海道大学大学院文学研究科修士課程（哲学専攻）入学
- 1956（昭和31）年3月 同上 修了（文学修士）
- 1959（昭和34）年3月 北海道大学大学院文学研究科博士課程（哲学専攻）入学
- 1962（昭和37）年3月 同上 修了
- 1960（昭和35）年4月 酪農学園大学専任講師
- 1961（昭和36）年4月～1965（昭和40）年3月
同大学 図書館長
- 1963（昭和38）年4月 同大学 助教授
- 1966（昭和41）年3月 同大学 退職
- 1966（昭和41）年4月 明星大学人文学部社会学科助教授
- 1975（昭和50）年4月 同大学 教授
- 1996（平成8）年4月 同大学 日野校舎図書館長
- 1998（平成10）年3月 同大学 定年退職

学会所属 日本哲学会
東大哲学会
北大哲学会
北海道哲学会
科学哲学会
多摩学会

山下淳志郎教授著作目録

著書・論文名	発表年月	発表誌名・発行所等
アウグスチヌスに於ける悪について	1955(昭和30)年2月	北大哲学会

人格と歴史

- ヘーゲルに於ける人倫の思惟的基礎—
1956(昭和31)年 3 月 修士論文
- ヘーゲルに於ける絶対知と歴史との関係
1959(昭和34)年 7 月 日本哲学会誌
- ヘーゲルに於ける時間について 1959(昭和34)年 9 月 北海道哲学会報
- ヘーゲルに於ける精神・時間・歴史
1965(昭和40)年 『酪農学園大学紀要』第2号
- 『倫理学』 1966(昭和41)年 明星大学
- デュルケームにおける或る一つの問題
1970(昭和45)年 3 月 『明星大学社会学科研究報告』第2集
- マックス・ウェーバーにおける個性的歴史認識の可能根拠と限界
1970(昭和45)年 5 月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第5号
- H. ルフェーブル『マルクスの社会学』(訳書)
1970(昭和45)年 7 月 せりか書房
- マックス・ウェーバーの歴史的主体性の問題
1973(昭和48)年 5 月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第9号
- 全体性の後退
—社会的存在と認識に関する序章—
1974(昭和49)年10月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第10号
- 柳田民俗学の基礎視点
—その中の3、仮説としての「常民」思想—
1974(昭和49)年 3 月 『明星大学社会学科研究報告』第6集
- 『講座 文化と倫理 —比較倫理の試み—』
1975(昭和50)年12月 芸林書房
- 弥勒耕地の人びとと生活(1)(共著)
1976(昭和51)年 『郷土誌 高遠』第6号
- ムラ共同体と近代化 1977(昭和52)年 2 月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第13号
- 人間と社会(『倫理学』第2章) 1978(昭和53)年 3 月 私立大学通信教育協会
- 弥勒耕地の人びとと生活(2)(共著)
1979(昭和54)年 『郷土誌 高遠』第8号
- 私論「音楽と社会」 1979(昭和54)年 3 月 『明星大学社会学科研究報告』第11集
- 社会学における「実証的」ということ
1980(昭和55)年 3 月 『明星大学社会学科研究報告』第12集
- 戦後の産業変動と地域性(共著) 1981(昭和56)年 3 月 『明星大学社会学研究紀要』第1号
- 弥勒耕地の人びとと生活(3)(共著)
1981(昭和56)年12月 『郷土誌 高遠』第11号

社会認識における「歴史」の問題

1983(昭和58)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第3号

社会学の社会学

—社会把握における存在論と認識論の問題—

1986(昭和61)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第6号

マックス・ウェーバーの歴史認識理論における因果性と目的論との関係

1987(昭和62)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第23号

N. ルーマンにおける「歴史と時間」の問題

—社会学方法論としての— 1990(平成2)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第10号

市民社会と近代国家(その一) 1993(平成5)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第13号

殖産興業の展開と岡谷近代製糸業 I

—1890年代における地域社会の構造転換—

1993(平成5)年3月 『明星大学研究紀要—人文学部—』第29号

日本社会思想の存否

—日本社会において社会思想の形成はありうるか—

1996(平成8)年3月 『明星大学社会学研究紀要』第16号

注: 著書・論文中「」を付したものは単行本を表す。